

『国際理解教育』 Vol.28 論文募集のお知らせ

本誌掲載の「編集規程」及び「投稿規程」に即し、『国際理解教育』28号に掲載する論文を募集しています。事前投稿申し込みは行っておりません。投稿規程を確認の上、9月30日の投稿期限までに編集委員会事務局（投稿規程参照）へご投稿ください。

《28号特集「感染症と国際理解教育」の主旨》

2019年末に中国の武漢で発生した新型コロナウイルス感染症（COVID-19、以下「新型コロナ」）は、瞬く間に世界に広がり、都市が封鎖され、医療崩壊の危機が生じた。世界経済は大きな打撃を受け、格差や貧困層が拡大し、特定地域出身者や感染者への差別や偏見が生じるなど、それまでの暮らしが脅かされる事態となった。

新型コロナのパンデミックにより、新たな感染症が近年、繰り返し現れてきたことへの懸念や反省が高まりつつある。SARSや新型インフルエンザなど、様々な感染症が21世紀以降に出現したわけだが、気候変動や森林開発、都市開発、グローバル化などがその背景にあると指摘されている。改めて、人間の無秩序な生態系への進出や、自然と人間との共生のあり方が問われている。

また、新型コロナのパンデミックにより、過去の歴史的経験への参照が行われている。例えば、第一次世界大戦中に猛威を振るったスペイン風邪を取り上げ、その教訓は何かなど、感染症をめぐる

歴史に注目が集まっている。私たちは、過去から何を学び、感染症問題にどう向き合うべきかが問われている。

日本では、新型コロナウイルス感染から子どもを守るため、2020年2月末に全国一斉の休校要請がなされた。その後の長期にわたる休校で話題になったのは、子どもの学力保証である。教育格差をどう埋めるのか、限られた時間内での教育活動に学校が追われた。他方、コロナ禍が席卷し、新しい生活様式が模索される中、オンライン授業などの新たな取り組みも見られた。withコロナの時代、学ぶ内容や方法を含め、国際理解教育はどうあるべきかが模索されている。

本特集「感染症と国際理解教育」では、本学会会員により感染症に関わる問題や教育実践について、国際理解教育の観点から考究することを目的とする。人権教育や環境教育、歴史教育など多様な立場からの投稿を期待したい。